

小布施町ミニ再開発の歩み

宮本 忠長

このあたりを再開発しようと、自治体なりあるいは、商工会、住民側より特別な意見の具申があって企画が進行したわけではない。

事実、自治体は、「まち」の中央を南北に貫通している都市間道路を拡幅して、交通体系を整備することが、「まち」の発展と信じ、建設省に都市計画道路の認定を申請しているようである。おりから昨年の夏、「まち」の「文化協会」「ライオンズクラブ」「商工会」等が呼びかけて「明日の小布施を語る」シンポジウムが開かれた。

当日は意外な盛況で、しかも聴講料を徴集しての町民集会となった。自治体の理事者も無論出席した。たまたま私は4名の講師団の一人として参加する機会が与えられた。シンポジウムは内容の濃い、しかも町民誰しもが不安を抱く、①自然が破壊されつつある雁田山の採石場問題、②「文化」の薫る「まち」づくりとは如何、③北齋館を核として「まち」全体が美術館のような「ふるさとづくり」が出来ないものか等々であった。

4人のパネラーは、自然科学、歴史学、土木工学、建築家とそれぞれ専門分野を受持ち、集会参加者と真剣に語り合う。老若男女、官民を問わず「我がふるさと」のために実に見事に充実したシンポジウムであった。熱気に包まれて集会は終り、再び会を重ねて語り合うことを約束して閉会した。——小布施町、人口1万3000人、歴史の薫る文化の漂う「まち」である。

私が小布施町の仕事を手がけるようになって、はや10数年の歳月が経った。父親も、この町の小学校や体育館などの仕事をさせて頂いていたから、親子二代でお世話になる。はじめ市村郁夫町長(故人)より設計指名を受けて、町立栗ヶ丘小学校(統合小)を設計する。それから順次町の公共施設のすべてを委嘱される。その理由は、同一の建築家に任せた方が、建築に統一ある整合性が得られ「まち」が美しくなる。しかも建築家も、「まち」の様子が年々すみずみまで判ってくれるので一石二鳥である。何より施主の心情を読み取ってくれるので助かる。お互に公私の生活に「はじめ」を守れば、建築家と施主との癒着などあり得ない、と。このように理事者、議会、設計者と相互信頼のなかで、次々と公共施設を手がけることが出来たことは、「まち」にとっても、また私にとっても大きな収穫であった。

私の設計姿勢は一貫していた。つまり、一つの施設は小規模で

あっても、その建築は周囲に調和して、風土に溶けこみ、「己れのみが唄を歌わぬ」こと、これを共通の手法に用いたのである。例えば、点在する土壁づくりの土蔵、民家白漆喰の壁、日本瓦の銀黒色の屋根、勾配等々RC造であれば打放コンクリートをテーマにする等、素材を共有し、建築空間は、必ず「まち」に向って、親しみを持って人々に語りかけるよう願って造型をしたのである。そのなかの一つに北齋館(葛飾北齋の肉筆画を専門に展示)がある。北齋館が誕生すると、町の様相は一変した。今までの小布施ではなくなった。北齋芸術に触れようと県下はもとより広く日本全国から人々が小布施の街に訪れた。今もって、年々入場者が増え続けている。眠れる里は活気が出、小布施は芸術文化の薫る美しい「まち」に蘇生する。町の人々は高まる熱気で文化に強い関心を持ち始める。もともとこの町は栗菓子製造で知られていた栗の里小布施であった。そして今日、人口1万3000人の田舎まち、小布施は完全に芸術の里、北齋の町として定着してくれるのである。

私が冒頭、このあたり、と記した周辺が、実は北齋館を核とし、しにせを誇る栗菓子製造者、地酒の醸造者達が次々と協同歩調をとられて、宗理庵(北齋館前に休憩所)、あかり博物館、土蔵を改良した喫茶店「朧」さらには、我が庭・屋敷を北齋館の空間に解放して、まちの美観形成を積極的に行い、自らの工場(傘風舎)も環境に合わせて、和菓子製造にふさわしく空間造形を演出する。

それらが引き金になり、いまこのあたり約150m×200m、およそ30,000㎡の開発計画へと進展するのである。この計画は、いま基本構想の策定中であって、まだ私自身完全にスケッチが固まらない段階である。地権者は、銀行、町役場、栗菓子製造者、地酒醸造者、個人住宅生活者等々7名である。私のイメージとして抱くテーマは、土地を有効に再利用し、古くからの街並みを保存し、美しい修景を大切に、決して古い型をそのまま踏襲することなく、新しい感性で、魅力ある街の空間構成を演出しようと試みている。そして思いやりのある温かな眼差しを輝かせて人々が楽しく暮らすことの出来る場づくりである。私は建築家としての情熱を賭け、3年後の完成を目指す。

(みやもと ただなが)